

課題解決型ミーティングの導入による非認知的スキルの変容 ～U15年代サッカー選手を対象に～

コーチング科学領域

5023A034—6 関根 竜汰

研究指導教員：堀野 博幸 教授

I. 序論

スポーツ活動において、よりよい成果を出すためには「認知的スキル」と、それ以外の多様なスキルや能力としての「非認知的スキル」が必要となる。非認知的スキルとは、絶対的な数値によって評価することが難しいスキルを指し、例えばコミュニケーションスキルや論理的思考性、課題解決型能力などが当てはまる。そして、スポーツ経験と非認知的スキルの関連を検討した研究（夏原ほか、2017；杉山、2004；大竹ほか、2009）より、体育授業以外でのスポーツ経験が非認知的スキルを育み、それが社会的・経済的成功につながる可能性が示唆されている。しかしながら、杉山（2008）は、単に体育やスポーツを行うだけでは、非認知的スキルが獲得されないことを指摘している。そのため、スポーツ経験を通して非認知的スキルを獲得させるためには、スキル獲得を目的とした指導者の関わりや環境づくりが重要であると考えられる。先行研究において、非認知的スキルの獲得を目的としたプログラム開発とその成果報告が行われている（高橋ほか、2019；上野、2016；Petitaps, 2001）。これらの研究では、いずれにおいても大学生が対象であり、非認知的スキルが発達しやすい時期である中学生を対象とした研究は少ない。

本研究では、スポーツにおける非認知的スキル向上の場面として、チームスポーツのミーティングに着目し、「課題解決型ミーティング」と名付けたプログラムの介入による中学生サッカー選手の非認知的スキルの変容を

調査することを目的とする。そのために、研究①では、中学生スポーツ選手の非認知的スキルを測定する尺度を作成し、研究②では、課題解決型ミーティング介入による非認知的スキルの変容を調査する。

II. 研究①

方法

2024年3月から2024年8月にかけて、中学校設置の運動部活動に所属する291名の中学生スポーツ選手を対象に質問紙調査を行った。質問項目は、課題解決型ミーティングによって向上すると想定される下位因子11因子を仮定し、先行研究より65項目を選定した。分析は、SPSS Statistics 28ならびにSPSS Amos22を使用し、探索的因子分析を実施した。そして、収束的妥当性および弁別的妥当性の検証を経て、構成概念妥当性の検証を実施した。また、専門家会議および検証的因子分析を経て内容的妥当性の検証を行った。

結果および考察

探索的因子分析および専門家会議の結果、「目標達成スキル尺度（4下位因子）」「個人の協働スキル尺度（2下位因子）」「自分で考え、信じる力尺度（2下位因子）」「チームのまとまり尺度（3下位因子）」の4つの尺度に分類された。検証的因子分析および構成概念妥当性の観点から4つの尺度の信頼性および妥当性は確認された。

III. 研究②

方法

2024年6月8日から2024年8月23日の

77日間にかけて、中学校設置のサッカー部に所属する選手63名（介入群：32名，非介入群：31名）を対象に「課題解決型ミーティング」の介入を行なった。介入前にpreテスト，介入後にpostテストを実施し，質問紙は研究①にて作成を行なった「目標達成スキル尺度」「個人の協働スキル尺度」「自分で考え，信じる力尺度」「チームのまとまり尺度」を使用し，非認知的スキルを実施した。

分析は，SPSS Statistics 28を使用し，ノンパラメトリック検定を実施した。それぞれの群の前後比較には，Wilcoxonの符号付順位検定（ $\alpha = .05$ ），2群間の介入前後の変化量の比較にはマン・ホイットニーのU検定を実施した（ $\alpha = .005$ ）。

介入内容

課題解決型ミーティングは，その日に取り組む課題と改善策を検討する「意識づけミーティング」，試合（練習）後は，設定した課題への振り返りを目的とする「振り返りミーティング」の2部構成で行なった。「振り返りミーティング」では，即時に試合動画の振り返りが可能なシステム（「トレンド」：パナソニック社）を活用し，指導者が選択した映像を視聴した後にミーティングを実施した。ミーティングは，毎回ランダムに3-4人の少人数で実施され，参加者全員に発言の機会を設けた。課題解決型ミーティングは，77日間の期間で計23回実施された。

結果

介入群のスコアの前後比較において，「評価・分析」（ $Z=3.024$ ， $p<.01$ ， $r=0.535$ ），「問題解決」（ $Z=2.960$ ， $p<.01$ ， $r=0.523$ ），「コミュニケーション」（ $Z=2.822$ ， $p<.01$ ， $r=0.499$ ），「自分を信じる力」（ $Z=1.999$ ， $p=.05$ ， $r=0.353$ ），「リーダーシップ」（ $Z=2.911$ ， $p<.01$ ， $r=0.515$ ）の因子で統計的に有意なスコアの向上が確認された。

2群間の介入前後の変化量の比較では，「問題解決」（ $U=264.00$ ， $Z=-3.20$ ， $p<.001$ ， $r=-0.404$ ），「コミュニケーション」（ $U=242.00$ ， $Z=-3.51$ ， $p<.001$ ， $r=-$

0.442）の2因子において，介入群の方が統計的に有意に向上していることが示された。

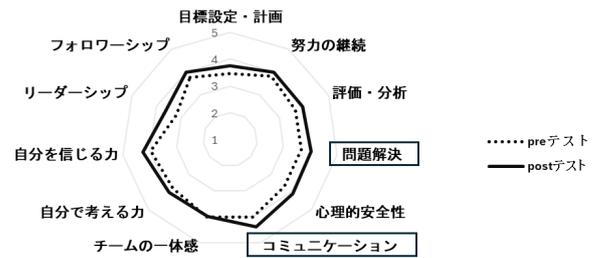


図1 介入群におけるスコア前後比較

考察

以上の結果から，介入によって有意に向上したと考えられる因子は「問題解決」と「コミュニケーション」である。意識づけミーティングで取り組む課題を明確にすること，振り返りミーティングで課題への取り組みへの評価とさらなる改善策を議論することの実施機会を創出したことが，「問題解決」の向上に寄与したと考えられる。また，少人数での議論がチームメイト全員との対話の機会を創出し，選手同士の関係性を育んだことで「コミュニケーション」が向上したと考えられる。Zimmerman (2000)は，非認知的スキルは，長期間にわたる経験や習慣によって向上することを指摘しており，本研究における77日間という介入期間では，その他の非認知的スキルは十分に発達しなかったと考えられる。今後の課題として，介入期間の延長や研究対象の拡張などが挙げられる。

IV. 文献

杉山佳生 (2008) スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性。大学体育学，5：3-11。

夏原隆之・加藤貴昭 (2017) 児童期および青年期の子どもにおける非認知的スキルの発達とスポーツ活動との関連性に関する：スポーツの何が非認知スキルの獲得に寄与しているのか。笹川スポーツ研究助成研究成果報告書，293-299。

Zimmerman, B. J. (2000) Attaining of self-regulation : A social cognitive perspective. Academic Press.